アウクスブルクの建築から見る 2000 年の歴史背景

榎本菜々実

はじめに

本研究調査報告書ではアウクスブルクの建物から建築様式を学び、そこから歴史的背景や文化を知ることを目的とする。

アウクスブルクは紀元前 15 年にローマ皇帝アウグストゥスによって軍事拠点として作らた、ドイツでも古い歴史を持つ街である。その特徴は建築物にも表れている。本研究調査報告書では、今回の派遣で実際に訪れた場所を中心に挙げていく。

1. 給水塔

給水塔はルネサンス様式の特徴が見られる六角形を基調とした大小の塔で構成され、中世の防衛用城壁やゲートの構造と一体化している。ゴシック様式からドイツ・ルネサンス様式への移行期、および 17 世紀初頭の改築・増築を経て現在の姿が形成された。都市の美観を意識した重厚な石造りや煉瓦造りが特徴である。高低差のあるアウクスブルク市では昔から効率よく水を送ることが課題であった。当初は水車を利用し、のちにピストンポンプや水力タービンを内部に収めて、高台にあるアウクスブルク旧市街へと水を汲み上げるハイテクな産業建築であった。1413 年から 1416 年、アウクスブルクに最初の給水塔が建築され、世界最古クラスの給水塔アンサンブルの起源となった。1545 年、衛生面や水質の観点から、湧き水（飲料水）と河川の水（加工・生活用水）を厳格に分離する先進的なシステムが確立された。17 世紀には市の建築家や技術者によりポンプや給水塔が大規模に拡張・改築され、有名なアウグストゥスやヘラクレスなどのモニュメンタルな噴水群へ水を供給した。深井戸ポンプや近代的な水道への移行に伴いその役目を終えたが、現在は貴重な産業遺産として世界遺産に登録されている。



アウクスブルク給水塔



給水塔内部の彫刻

2. フッゲライ

フッゲライは世界最古の社会福祉住宅であり、16 世紀初頭のゴシック様式から初期ルネサンス様式への過渡期の建築様式を備えている。建物の端の壁面は、階段城に切り立った屋根が採用されており、これには後期ゴシック調の特徴が見られる。また、フッゲライの長屋は、窓の位置、ドアの形、階高などが全て同じ規格で統一されている。この景観は、中世の無秩序な建築群とは一線を画す、ルネサンス的な合理的・数学的な美意識を表している。フッゲライは 16 世紀に当時の大富豪、フッガー家が建設した。最初は 52 棟の長屋が建設された。16 世紀後半に追加された「聖マルクス協会」は、当時アウクスブルクで広がっていたプロテスタントの波に対抗したものであり、熱心なカトリック信者だったフッガー家がカトリック信者の聖域を守ろうとした歴史を感じる。そして、フッゲライの建物は第二次世界大戦の空爆で 3 分の 2 が破壊された。現在見られる美しい景観は、戦後にあえて近代化せず、16 世紀の設計を守り抜いた証である。また、フッゲライの敷地内にある防空壕は第二次世界大戦の悲惨さを物語っている。





3. アウクスブルク市庁舎

1615 年から 1620 年にかけて、建築家エリアス・ホルによって建設された。当時、アルプス以北では初めての 6 階を超える高さに達したルネサンス世俗建築であり、世界的に見ても極めて画期的な高層建築であった。市庁舎の外観には、アウクスブルクの歩んできた 2000 年の歴史がわかりやすくデザインされている。建物の正面に双頭の鷲の紋章が描かれており、この街が神聖ローマ皇帝から直接認められた帝国自由都市として最高峰の権力と独立性を持っていたことを示している。最上部に置かれた松ぼっくりは、もともと、紀元前の創設期にローマ人が持ち込んだ幸運や繁栄のシンボルであり、古代ローマからの深いルーツを象徴している。4 階にある大広間は黄金の間と呼ばれ、贅の限りを尽くした内装が有名である。約 552 平方メートル、天井高 14 メートルという圧倒的な大空間に、壁から天井まで見事な金箔装飾と美しいフレスコ画が敷き詰められている。これはかつて神聖ローマ帝国の重要な会議や、皇帝の戴冠式の祝宴などが催され、莫大な富を誇った年の経済力を世界に見せつける役割を果たしていた。





市庁舎内にある黄金の間

4. ノイシュヴァンシュタイン城

最後はアウクスブルク市内にある建造物ではないが、今回の派遣で私が最も印象深かったノイシュヴァンシュタイン城について取り上げる。

ノイシュヴァンシュタイン城はバイエルン国王ルートヴィヒ 2 世の命により 1869 年に着工された、ロマネスク復興様式を基調とする 19 世紀後半の歴史主義建築である．中世の城塞を理想化して設計されているが、骨格はロマネスク復興様式をベースに後期ゴシック様式やビザンティ様式が組み合わされている。　政治的実権を失いつつあったルートヴィヒ 2 世が敬愛した作曲家リヒャルト・ワーグナーのオペラの世界や、中世騎士道への憧憬を形にするために建造した。そのため場内にある主要な部屋の壁は、リヒャルト・ワーグナーの楽劇のモチーフにもなった中世ドイツの叙事詩や伝説の絵画で埋め尽くされている。王座の間は、ビザンティン様式の境界をモデルに作られており、壁や天井は金箔の背景にキリストや聖人、歴代王たちが描かれている。これは中世のモザイク画のように見えるが、実は当時の画家が最新の絵の具で書いた模倣である。ルートヴィヒ 2 世は、19 世紀のリアルな絵画よりも、中世の平面的で宗教的な厳かさのある古いタッチの方が、王の権威を高めると信じてこのスタイルを徹底させた。





ノイシュヴァンシュタイン城から見えるフュッセンの街並み

おわりに

本調査を通じて、アウクスブルクを中心とした建築群が、単に当時の芸術的・建築的様式を提示するだけにとどまらず、技術革新や都市の経済力、社会的背景、さらには人々の信仰や権威のあり方までも力強く物語っていることを実感した。

中世からルネサンス、そして 19 世紀の歴史主義に至るまで、それぞれの時代が求めた「美」と「機能」の融合は、現代の都

市造りや文化遺産の保存においても極めて深い示唆を与えてくれる。現地での実地調査を通して得た視点を今後の研究や学びに活かしていきたい。